

# An Interpretation of Chaucer's *Troilus and Criseyde* [1]

—Criseyde の変心\*—

松 田 英

## はじめに

我々が中世の文学作品に接して大いにかきたてられる興味の対象の一つに、一体中世の人々はその作品を、あるいはその登場人物をどううけとっていたのだろうか、ということがある。作品それ自体にこのことを臭わせるような箇所がある場合は尚更だ。この点から考えてみると、Chaucer は、現代の読者を魅了せずにはおかない Criseyde という女性を考えるうえで貴重な示唆をはっきりと残してくれている。*Troilus and Criseyde* の後に続く *The Legend of Good Women* の F プロローグの次の部分を御覧いただきたい。

And of Creseyde thou hast seyde as  
the lyste,  
That maketh men to wommen lasse  
triste,  
That ben as trewe as ever was any  
steel.

(*L. G. W.*, F. ll. 332-5)<sup>1)</sup>

これはとりもなおさず14世紀の聴衆の反応をうけたものに他ならない。だが、それはある程度予想できたことであつた。*L. G. W.* の「呼び水」ともいふべき詩行が *Troilus* の中に見出せるからである。

\* この小論は、1980年12月6日、「中世英文学談話会」第25回研究発表会において口頭発表した原稿に修正加筆したものである。

1) 文中に於ける Chaucer の引用は全て Robinson 版 (second edition) からのものである。

Bysechyng every lady bright of hewe,  
And every gentil womman, what she  
be,  
That al be that Criseyde was un-  
trewe,  
That for that gilt she be nat wroth  
with me.  
Ye may hire giltes in other bokes se ;  
And gladlier I wol write, yif yow  
leste,  
Penelopeës trouthe and good Alceste.  
(*Troilus and Criseyde*, V. ll. 1772-8)<sup>2)</sup>

今引用した2箇所から推測できることは、当時、聴衆達の中に「何故 Criseyde を不実なる恋人にしたのか」と詩人を責める声があがっていたのではないかということである。

その時 Chaucer はどう考えていたのだろうか。何を伝えたいと思っていたのだろうか。私はこれから数回にわけて *Troilus and Criseyde* の解釈を扱うつもりだが、その出発点にこの Criseyde の裏切りをおこうと思う。

## Troilus

Criseyde の変心——いいかえれば Criseyde の characterization——を扱う前提として、我々は *Troilus* という作品全体の枠組を無視するわけにはいかない。ある枠組の中で一組の男女が、愛を知り、それを己れのものとし、そして失っていくからである。それゆえ、我々はまず作品の流れに沿ってその愛をみていくことにし

2) 以後、特別に記載のあるものを除いては全て *Troilus and Criseyde* から引用。

よう。すなわち、主人公を追っていくことから。Criseyde の変心が重大な鍵を握る *Troilus and Criseyde* は次の詩行からはじまる。

The double sorwe of Troilus to tell-  
en,  
That was the kyng Priamus sone of  
Troye,  
In lovyng, how his adventures fellen  
Fro wo to wele, and after out of joie,  
My purpos is, er that I parte fro ye.  
(I, ll. 1-5)

この数行から少なくとも次の諸点が事実として浮かんでこよう。①詩人は Troilus を主人公としたこと、②しかも作品のテーマは彼の「二重の哀しみ」であること、③聴衆は——この点が重要なのだが——話の結末を冒頭で知らされていること、などである。そして続く ll. 54-6 に於いては「Criseyde の裏切り」がはっきりと述べられている。

In which ye may the double sorwes  
here  
Of Troilus in lovyng of Criseyde,  
And how that she forsook hym er she  
deyde.

聴衆は「いつかきっと Criseyde が Troilus を捨てる時がくる」という気持ちをもって詩人の朗唱を聞いているのだ。

その結末のわかりきった恋のそもそもは次の様にしてはじまる。

At which the God of Love gan loken  
rowe  
Right for despit, and shop for to ben  
wroken.  
He kidde anon his bowe nas naught  
broken ;  
For sodeynly he hitte hym atte fulle ;

And yet as proud a pekok kan be  
pulle.

(I, ll. 206-10)

恋する者達をあなどる Troilus への愛の神の復讐という形——*The Romaunt of the Rose*, ll. 923-98, ll.1723-1926 にある愛の神の姿と全く一致するものである。

これはまた、Andreas の *The Art of Courtly Love* の Book I, chap. 1 をも思わせるものだ<sup>3)</sup>。すなわち「美しいものを目にすることが恋の始まりになる」というあれである。この時点で聴衆は共通にある情緒を感じたことだろう。誤解を恐れずにあえてその情緒を名指すなら「宮廷風恋愛」がそれである。

これ以降 Troilus の辿る姿は Dodd も指摘している様に典型的な courtly lover の姿である<sup>4)</sup>。以下にその諸相を挙げてみよう。まず第一に“Religion of Love”という面。

And to the God of Love thus seyde  
he  
With pitous vois, “O lord, now youres  
is  
My spirit, which that oughte youres  
be.  
Yow thanke I, lord, that han me  
brought to this.

(I, ll. 421-4)

次いで“malady of love”の徴候が現われる。Andreas の“Rules of love”第23条、および*The Romaunt of the Rose* の詩人の苦しみと共通するものである。

In hym ne deynd spare blood roial  
The fyr of love—the wherfro God  
me blesse——

3) Andreas Capellanus: *The Art of Courtly Love* (J. J. Parry tr.) Ungar, 1959.

4) W. G. Dodd: *Courtly Love in Chaucer and Gower* Harvard Univ. 1913.

Ne him forbar in no degree for al  
 His vertu or his excellent prowesse,  
 But held hym as his thral lowe in  
 destresse,  
 And brende hym so in soundry wise  
 ay newe,  
 That sexti tyme a day he loste his  
 hewe.

(I, ll. 435-41)

この恋は「人を高貴にする」という効果を持っていた。Troilus も人に後ろ指さされることのない立派な騎士となる。

For he bicom the frendlieste wight,  
 The gentilest, and ek the mooste fre,  
 The thriftiest and oon the beste  
 knyght,  
 That in his tyme was or myghte be.  
 Dede were his japes and his cruelte,  
 His heighe port and his manere es-  
 traunge,  
 And ecch of tho gan for a vertu  
 chaunge.

(I, ll. 1079-85)

そして Troilus は「腹心の友」=secretary として物語の中で大きな役割を与えられることになる Pandarus を選ぶのである。さて「恋する男」はいまや Troy 城内で Hector と並ぶ勇士となった。我々はここでその相手の貴婦人 Criseyde をみることにしよう。

### Criseyde

彼女もまた courtly lover の姿を——少なくとも外見的には——とっている。

She nas nat with the leste of hire  
 stature,  
 But alle hire lymes so wel answer-  
 ynge

Weren to wommanhod, that creature  
 Was nevere lasse mannyssh in sem-  
 ynge  
 And ek the pure wise of hire mev-  
 ynge  
 Shewed wel that men myght in hire  
 gesse  
 Honour, estat, and wommanly no-  
 blesse.

(I, ll. 281-7)

だが一步 Criseyde の中に踏み込んでいくといくつかの性格が浮きぼりになってくる。まず「慎重な性格」の持ち主である。Troilus へ手紙を書くようにと Pandarus にすすめられ、再三にわたり拒絶した挙句、やっとのことで手紙をしたためた時の彼女の様子、その手紙の文面にその片鱗がうかがえる。

She thanked hym of al that he wel  
 mente  
 Towardes hire, but holden hym in  
 honde  
 She nolde nought, ne make hireselven  
 bonde  
 In love ; but as his suster, hym to  
 plese,  
 She wolde ay fayn, to doon his herte  
 an ese.

(II, ll. 1221-5)

また Troilus から駆け落ちの提案をうけた時の反応もこの性格を裏打ちするものと考えられよう。

次に C. S. Lewis が指摘した「恐怖心の強い性格」<sup>5)</sup>もその証左となるものが多い。

So as she was the ferfulleste wight  
 (II, l. 450)

5) C. S. Lewis: *The Allegory of Love*, Oxford, 1936.

I am of Grekes so fered That I deye.  
(II, l. 124)

それではこの2つの性格は Criseyde のどこから出てくるものであろうか。「慎重さ」と「恐怖心」、その背後には彼女の「恥」に対する感覚、「廉恥心」がある。人の目に自分達の「愛」が触れることを恐れる態度だ。

Woot noon of it but ye?  
(II, l. 500)

Now sette a caas : the hardest is,  
ywys,  
Men myghten demen thathe loveth me.  
(II, ll. 729-30)

「恥」に対する感覚は、*The Franklin's Tale* の Arveragus も持ちあわせている。だが、あの場合彼は明らかに現代人の我々からみても「恥」となるような立場にあった。これに反して Criseyde の立場は、「宮廷風恋愛」という情緒からの説明がなくては、すなわち「この種の愛は秘密にすべき」という code なくしては現代の読者にはピンとこないものである。14世紀の聴衆はこの話の枠組、前提を承知していたということについては既に述べたが、彼らは承知していたがゆえに何の違和感ももたなかったのであろう。

ところで Criseyde は “calculating” であるという読み方がある。はたしてそうであろうか。ここでは「比較」を用いて考える手法が役に立つだろう。とはいっても全く関係のない人物を引っ張り出したところで何の意味もない。幸いなことに Criseyde はいろいろな詩人が描いている。Shakespeare の *Cressida* はどうだろう。

But more in Troilus thousandfold I  
see  
Than in the glass of Pandar's praise  
may be.

Yet hold I off : women are angels,  
wooning ;  
Things won are done—joy's soul  
lies in the doing.  
That she beloved knows nought that  
knows not this :  
Men prize the thing ungained more  
than it is.  
That she was never yet that ever  
knew  
Love got so sweet as when desire did  
sue.  
Therefore this maxim out of love I  
teach :  
'Achievement is command ; ungained,  
beseech'.  
Then though my heart's content firm  
love doth bear,  
Nothing of that shall from mine eyes  
appear.<sup>6)</sup>

この姿と比べてみると一目瞭然であろう。更に Deiphebus へおもむく Criseyde を Chaucer はこう描写している。

Al innocent of Pandarus entente,  
Quod tho Criseyde, “Go we, uncle  
deere”  
(II, ll. 1723-4)

Book III に於ける雨の夜のエピソードとて同じである。Pandarus に弱点をつかれ、結局は妥協してその家にとどまる Criseyde は何も知らなかったのだ。

But er he com, I wil up first arise  
(III, l. 940)

Troilus が忍んで来ることを計算に入れてい

6) W. Shakespeare : *Troilus and Cressida*, I. 2. ll. 235-96.

れば先にやすんでいるわけはなかろう。また仮にそれを頭に入れていたとすれば、しかしこの仕草は余りに打算が行き過ぎており、物語を聴いている者達にはついていくことができなからう。テキストを行ったりきたりできる我々と違い耳で聞くという一過性の作業なのだから。Criseyde は“wis”であってもとりたてて“calculating”というほどのものではないのである。むしろ普通の女性といえよう。

さて、この同根をもつ「慎重さ」と「恐怖心」は「決定できない性格」を導き出す。しかしこれとても父 Calcas が Troy を裏切り Greek へ走り、独り Hector の庇護の下、黒衣にて暮す女の身であればもったもな事と思われる。そしてその性格に「恋のとりもち役」Pandarus がつけ込むのである。一方には、一貫して Criseyde に好意を寄せ、Donaldson をして“Narrator loves Criseyde”<sup>7)</sup>といわせしめた Narrator がいる。

### Narrator

Narrator の役割は2つある。まず第一に Criseyde の弁護を一手に引き受けている。そして第二は聴衆に対して2つのことを常に思い出させる、言葉をかえれば2つの枠組を示すという役割である。このうち第一の「弁護」については Donaldson に言及されているのでここではおいておくことにして二番目について考えてみよう。枠組の一つは「宮廷風恋愛」という情緒である。筋の展開の中で聴衆がこれに気づいていることは先に述べたが、Narrator もまた口に出してこの情緒の存在を示してくれる。

Now myghte som envious jangle thus :  
 “This was a sodeyn love ; how myght  
 it be  
 That she so lightly loved Troilus,  
 Right for the firste, syghte, ye, par-  
 de?”

Now whoso seith so, mote he nevere  
 ythe !  
 For every thyng, a gynnyng hath it  
 nede  
 Er al be wrought, withowten any dr-  
 ede.

(II, ll. 666-72)

衆知の如く、「宮廷風恋愛」にあっては“sodeyn love”は卑しむべきものだからである。二つ目は「事の成り行き」を予め聴衆に知らせること、「悲劇」という枠組を思い出させることである。詩人は Book I の冒頭で Criseyde の変心を述べた後、この件に関しては口をつぐむ。Narrator も然りである。2人は時には一体となり、Troilus と Criseyde の愛を見守っていた。が、事実——Criseyde の裏切り——はいかんともしがたい。いずれは口に出さねばならぬ。こうして Book IV の序詩でやがて迎える結末を予告するのである。

それでは Narrator は「心変わり」をどう位置づけているのか、を考えてみよう。先に引用した Criseyde 像 ll. 1079-85 と同じ内容をもつ箇所が「裏切り」の後に出てくる。次の部分だ。

She sobre was, ek symple, and wys  
 withal,  
 The best ynorisshed ek that myghte  
 be,  
 And goodly of hire speche in general,  
 Charitable, estatlich, lusty, and fre ;  
 Ne nevere mo ne lakked hire pite ;  
 Tendre-herted, slydyng of corage ;  
 But trewely, I kan nat telle hire age.

(V, ll. 820-6)

ここで目新しいことは“slydyng of corage”という特質だ<sup>8)</sup>。しかしこの表現は、以前には見当たらない。つまり Narrator は結果論として

7) E. T. Donaldson : *Speaking of Chaucer*, The Athlone Press, 1970.

8) cf. 繁尾久 : 『中世英文学点描』, 学際社, 1974.

ここに入れたにすぎないのである。第二の枠組を示すことがその任務ゆえに Book V に至っては気がすすまぬことながらこういうほかなかったのだらう。

### Criseyde の変心

さて前項まで見てきた Criseyde の characterization と裏切りがどうかかわるかということが問題となる。いや、事実の問題としてのみとらえるならば事は明白であり、どんなに弁護しようとも Criseyde に救いはないだらう。にもかかわらず私には、そして殆どの読者にとっても同じであると思われるが、Criseyde だけに責任を負わすことはどうにも気が重いのである。考えてみれば、この作品には Heren Storm Corsa が指摘するように<sup>9)</sup> betrayal が満ちあふれている。背景となった Troy 戦争は Greek の Helen を Troy の Paris が言葉巧みに誘い出したことに端を発している。また Calcas の裏切りや Pandarus の善意からでたとはいえその false words, そして Hector の Criseyde への誓言にもかかわらず彼を先頭とした Troy 議会の Criseyde 引き渡し決定という裏切り。これらの中にあつて Criseyde のみを責めるわけにはいかないのである。更に Troilus にも傷がある。

And of hire look in him ther gan to  
quyken  
So gret desir and such affeccoun,  
That in his hertes botme gan to sti-  
ken  
Of hir his fixe and depe impressioun.  
(I, ll. 295-8)

But Troilus, though as the fir he  
brende  
For sharp desir of hope and of ples-  
aunce,  
He nought forgat his goode governa-

9) H. S. Corsa : *Chaucer*, Notre Dame, 1964.

unce.

(III, ll. 425-7)

Troilus の心の底には “desir”=快楽に対する欲望が存在している。そして彼は Book III に於いて、Pandarus と共謀し Criseyde を自分のものに、いいかえれば自らの欲望に負けてしまう。これは作品の支配的情緒を「宮廷風恋愛」と知っていた聴衆に「悲劇の始まり」、恋の最高点からの下降を予感させるものである<sup>10)</sup>。そしてここでもう一人、Diomedes の働きも大きいものである。

But natheles, wel in his herte he th-  
oughte,  
That she nas nat withoutea love in  
Troie ;  
(V, ll. 778-9)

“Kan I nat seyn what may the cause  
be,  
But if for love of som Troian it were,  
(V, ll. 876-7)

このように Troilus の存在を見抜いている Diomedes に対し、何よりもその愛を人に知られたくない Criseyde は次のように反応するしかないのである。

“But as to speke of love, ywis”, she  
seyde,  
“I hadde a lord, to whom I wedded  
was,  
The whos myn herte al was, til that  
he deyde ;  
And other love, as help me now Pal-  
las,  
Ther in myn herte nys, ne nevere  
was.  
(V, ll. 974-8)

10) Andreas : *The Art of Courtly Love*, Book I, VI.

ここに至ると Criseyde に残された道は自らの行動を正当化することだけとなる。Diomedes と一緒になることを決意し、ブローチを与えるというこれまでの characterization を逸脱した行動に走る Criseyde は、しかし Troilus の名誉を守りきるというところから、彼女なりの論理で裏切り者となったのである。

### ま と め

しかしここで全てが終わったわけではない。我々はこれを14世紀の聴衆、中世の文学観に照らさなければならないのである。それは結末が知らされていた、あるいは結末を知っていたということである。歴史的事実として考えられていた Troilus の物語は、たとえ聴衆がその恋の永続性をどんなに願ったとしても、また詩人が2人を幸せな状態のままにおいておきたいと願っていてもその筋を曲げることはできないのであり、ゆえにその決められた枠組の中でどこま

で登場人物を発展させうるかという点からみななければならないのだ。詩人は *Troilus* に於いて「マリオネット」である Troilus, Criseyde, そして Pandarus の個性を枠組が許すそのぎりぎりの所まで発展させた。そしてそれは毎夜このお話を楽しみに集ってくる聴衆、(こういういい方が許されるならば)「木を見て森を見ず」という姿勢の14世紀の聴衆を魅惑したのであろう。彼等もまた Narrator の如く Criseyde を愛してしまったのである。Narrator は時折、枠組を示しながらも、最後の最後まで決定的瞬間を引き延ばした。つまり、Troilus に対し希望を残していたのであり、その結果、悲劇性はより一層ますこととなった。聴衆達はそれを知っていたにもかかわらず結末に至り、Troilus には救いが用意され、愛すべき Criseyde には「裏切り」の汚名しかなかったというところから、この小論の冒頭に挙げた如き反応を示したのではないだろうか。